

## すぎさわ 杉沢C遺跡（第2次）

遺跡番号 461-145  
調査回数 第2次  
所在地 山形県飽海郡遊佐町杉沢字北ノ前・中田地内  
北緯・東経 39度0分39秒・139度57分58秒  
調査委託者 山形県観光文化スポーツ部文化振興・文化財活用課 庄内総合支庁産業経済部農村整備課  
起因事業 農地整備事業（経営体育成型）杉沢前田地区  
調査面積 1,160㎡  
受託期間 令和3年5月1日～令和4年3月31日  
現地調査 令和3年6月22日～9月10日  
調査担当者 小林圭一（現場責任者）・菅原哲文・草野潤平  
調査協力 遊佐町教育委員会、月光川土地改良区、山形県教育庁庄内教育事務所  
遺跡種別 集落跡  
時代 縄文時代、中世、近世  
遺構 溝跡・土坑・柱穴・河川跡  
遺物 縄文土器・石製品・陶磁器・金属製品（文化財認定箱数：12箱）



遺跡位置図（1：50,000）

### 調査の概要

杉沢C遺跡は山形県の北西端に当たる遊佐町杉沢地区に位置する縄文時代と中・近世の複合遺跡である。鳥海山南麓の小盆地を西流する月光川支流の熊野川の左岸に立地しており、1953（昭和28）年に石囲いの中から横臥した状態で、完形の土偶が発見されたことで有名な杉沢A遺跡からは、600mほど東に離れている。また対岸には1978（昭和53）年に国の重要無形文化財に指定された番楽（山伏によって舞われる神楽）の「杉沢比山」の舞台となる熊野神社が位置している。

調査区は熊野川南岸に沿っており、全体が旧河道跡上に営まれていた。河道が埋没する過程において、縄文時代以降の活動の痕跡が確認され、縄文時代中期中葉大木8a式、後期前半（南境式・宝ヶ峯式）、晩期後半大洞C2～A'式の土器がまとまって出土した。中期の土器は調査区南側の黒色土、後期の土器はその北側の褐色土、晩期の土器は調査区西側の熊野川に近い褐色土から出土しており、年代が下るに従って川に近づく傾向が看取される。特に晩期は杉沢A遺跡の土偶の時期（大洞C2新式）に相当しており、同遺跡との関連性が想起される。縄文土器は装飾の乏しい半精製や粗製土器が大半を占め、掘り込まれた遺構が確認できなかったことから、川辺の作業場としての遺跡の性格が推定される。スス状の黒色付着物があり、天然アスファルトを精選したと思われる土器も出土している。

近世では建物の柱穴と思われるピットがD区で多数検出された。多くに柱痕跡が見られ、辛うじて残存した木材の年代を測定したところ、江戸時代前期頃の測定値（320～350年前）が得られている。調査区域に鳥海山で修行する山伏の宿坊があったことを示す絵図が残されており、「別当坊」と「宝前坊」の宿坊名があり、それ

を裏付ける成果を得ることができた。E区の北側では、水路と見られる溝跡を検出したが、板材を固定したと思われる杭列が確認できた。

### まとめ

杉沢C遺跡の発掘調査では、鳥海山麓の豊かな自然環境の中で、縄文時代中期から晩期にかけて、生活が営まれていた様相をさらに明らかにすることができた。鳥海山麓の恵まれた資源を十分に利用して、川辺での作業を

執り行っていたのであろう。

中・近世では、鳥海修験の拠点として当地が機能しており、今回の発掘調査でも宿坊の痕跡と推定される柱穴群を多数検出した。

杉沢C遺跡は河道に形成された集落跡であり、第1次調査区の周囲を調査したが、今回の調査で河道の広がりや土層の堆積の状況をより詳しく確認することができた。



写真1 調査区から鳥海山を望む



写真2 D区柱穴群検出状況（西から）



写真3 D区柱穴群検出状況（東から）



写真4 D区旧河道跡土層位断面（西から）



写真5 E区縄文時代晩期土器（RP106）出土状況



写真6 E区縄文時代後期土器（RP110・111）出土状況

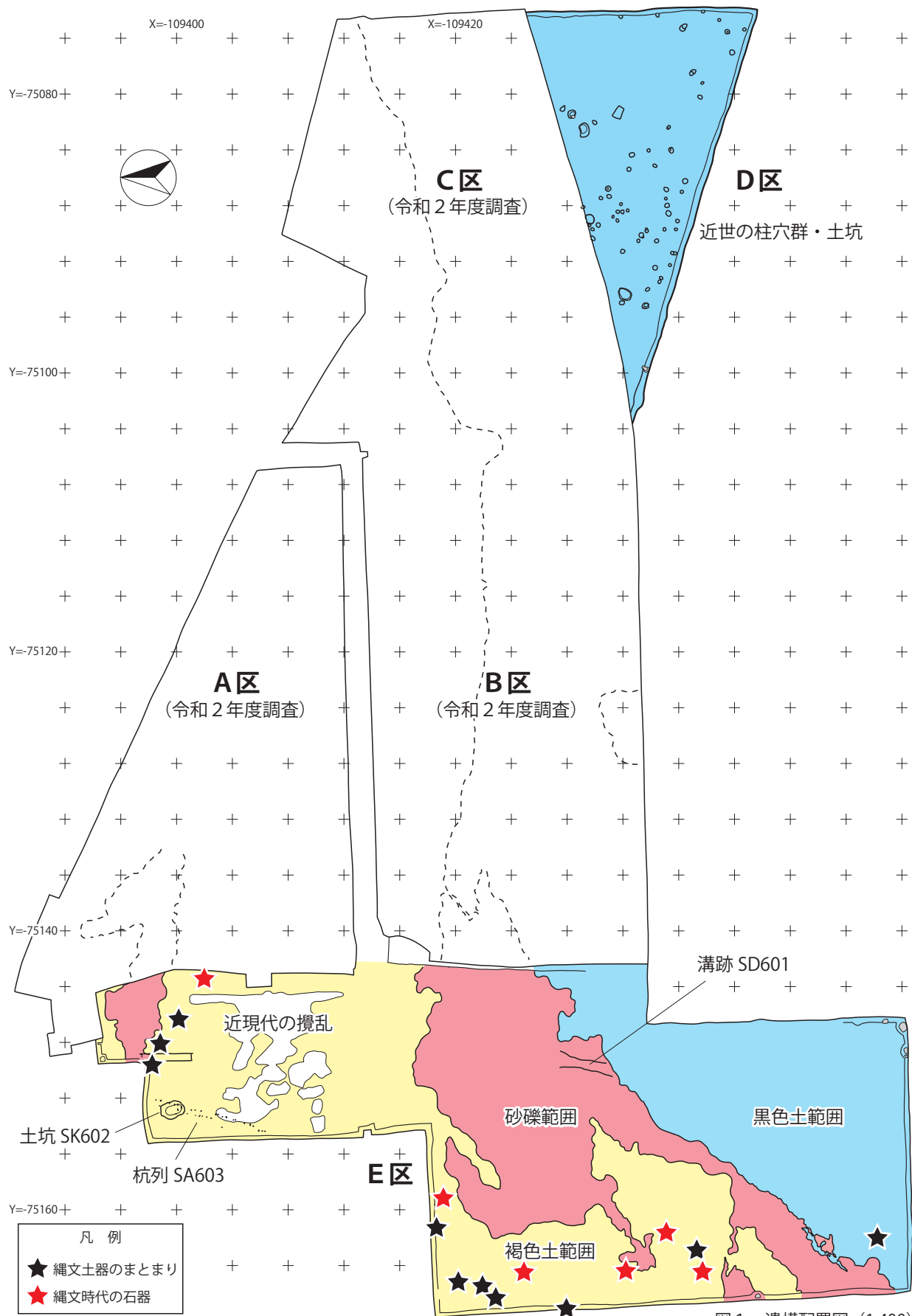


図1 遺構配置図 (1:400)

図1 杉沢C遺跡遺構配置図 (縮尺: 1/400)





写真7 杉沢C遺跡調査区全体写真（北：左側）